

都市開発の観点から見た花街の近現代史  
—花街としての銘酒屋・赤線・三業地・カフェー街—

Modern history of Hanamachi and methodology of urban development  
Red-right district, Geisha-town, and Hostess Street

37-176155 松本春菜

Hon-kenkyu no mokuteki ha hanamachi to iu gensho wo saikou suru kotode aru. Hanamachi (a reception world of Prostitute and hostess) ha huzoku gensho dearu. Iro (sex appeal) to Gei (technique) ga orinasu kukan deari, gender no kouzo ga umidasareru masani sono genba demo aru. Hanamachi ha douzini tosikaihatu (urban development) no syudan de aru. Yueni, tosikeikaku ha konoizitu wo uketome, sorega donoyounishite menomaeno tosikukan wo keisei si, mata irodotte kitaka kousatu subeki nanoda.

1.問題の所存と研究の背景

1-1.「花街」の定義

そもそも、「花街」とは何であろうか。本論文では「花街」という言葉を以下のように定義する。つまり、飲食・宿泊(入浴含む)・遊技のいずれかの業態において、女性あるいは女性的な存在が接待サービスを提供する施設、及び関連する商業施設が集積した空間である。接待サービスなのでその取引には金銭を伴い、その内容は女性性を商品化している。気配り、明るさ、お話し上手、可愛らしさ、感情的、幼稚…等々といった一連の「女らしい」と言える動作の反復。つまり「花街」とは、これらの記号化された「女らしさ」を商品として提供する空間である。この空間において、客(=消費者)となるのは基本的に成人男性であり、接客婦の女性(玄人)との間に明確な男女役割分担が見られることから、ジェンダーの非対称性構造が極めて特異な空間であるともいえる。

しかし、これが単なる同業種の集合地であったら、空間的にはまとまっても社会的なまとまりが生まれない。明田(1990)は、「花街」の特徴として、「一定の役員(普通年寄、時には肝煎という)によって指導された相互扶助的組織を持ち、官憲や競争相手には結束して対処する生活協同体の根拠地」であることを引き合いに出し、「花街」は単なる関連産業の集中地ではなく、「機能的に統制のとれた」ものであることを

その定義に加えた。私もそれを引き継ぐことにする。

1-2.「花街」と盛り場

「花街」という現象の背景にあるもの、そこに目を凝らすことで見えてくるものがある。従来、「花街」は盛り場の一部を構成し、その中では主として「男子の慰安者」(三宅 1935)たるべき位置付けを与えられ、それゆえどうしても余暇的娯楽とみなされやすかった。「盛り場」をして「人類最高の創造物」とであると評した服部(1981)をひくまでもなく、「盛り場」の学術上における位置は都市生活民のために息抜き、慰安の場所である。前屋敷(2003)や牛垣(2008)がわかりやすく整理するように、これまでの「盛り場」研究は、「入れ物、器」としての空間形態的な議論になろうが、「盛り場」を闊歩する群衆の空間的实践としての「出来事」や「演劇性」(吉見 1987)をベースとした議論になろうが、その言わんとする「盛り場」の本質に変わりはない。

事実、「花街」は法制度上風俗産業と位置付けられ、フーズクと言えやすなわち男の娯楽の別天地と安直に理解される今日この頃である。飲む・打つ・買うというプロセスを通して商品化された女(の記号)を買う場所がフーズクであり、大多数の男性にとっては隠れた生活必需品らし

いが、それを楽しむのはあくまでも余暇的行為である。いや、仕事の一部だと胸張って言える男が何人いる？ここから市民(あくまで市民と言ひ張る、その対象は限られているのに)の娯楽と慰安の場所としての「盛り場」観が生まれ、「花街」はそこにおける基幹的産業であり続けた。

### 1-3. 「芸」と「色」のせめぎあい

そこから必然的に生まれる論点が、「芸」と「色」をめぐる問題である。「花街」の需要層は現在でも男性が中心である。男の慰安は果たして「色」なのか「芸」なのか？芸者町をはじめとする一部の花街は、「色」を排除して「芸」の世界としてその威信を誇る。一方、ソープランドのように本番サービスが黙認された「色」の境地たる存在がある。戦前は見転芸者・大正芸者と言って売色専門の芸者もいた。現代の風俗嬢の中でもトップクラスに位置するお嬢は自らを売春婦ではなくケアワーカーであると主張する。ゆえに、「花街」を語る多くの論者が、「芸」と「色」の間の線引きに苦心してきた。

芸者町を例に挙げよう。神楽坂と新湯古町を舞台に論じた澤村(2012)は、売春防止法以降の「花街」に「色」(売春という意味で使っている)はなく、色街と「花街」を混同するのは誤解であると主張し、日本の伝統的な建造物景観と「伝統芸能」が息づく、「女が男を育てる町」を保存していく試みに対して非常に好意的だ。

長野県諏訪湖周辺の地方花街を対象とした谷岡(2015)は、やはり売春防止法前後に着目して、両者の境界線を探っているが、「色」の領域に関する議論が売春なのかそれともお色気商法一般をさすのか不明確で、結論も曖昧なまま終わっている。

しかし、「芸」と「色」という語り口、その言説には芸者町側の意図的な戦略があることを忘れてはならない。竹中(2007)が京都の花柳界とまちづくりの文脈を分析して示したように、芸者町は常に売春(ある種の「色」)に対して厳しい目を向け、「芸」の空間と自らを定義づけることで、絶えず「色」の世界からの切り離しと、その距離感において自らを価値づけてきた。彼女らにとって「色」は即席的な性行為を意味する。そこには情緒もへったくれもなければ、時間とお金をかけてじっくり「遊ぶ」という愉しみがない。岩下(2006=2009)が東京及び全国の芸者町の頂点に君臨する新橋花街の経験から述べる

ように、「遊び」という行為じたいが意味を持つのが「芸」の世界なのである。気を付けたいのは、ここで「遊び」の末に「色」にたどり着く可能性までは否定していないということである。重要なのはプロセスなのであり、それが日本のおもてなし文化として切り出され消費されている。

また、新橋、柳橋、赤坂という東京三大花街の現役芸妓からのインタビューをまとめた岩下(2007)は、高級花街と伝統性と国家との相互関係について大きな示唆を含む。高級な「花街」になれば、「芸」を磨く時間も金も調達するに抵抗が少ない。特に新橋花街は、明治維新の立役者たちを根底から支えていたという歴史的事実から、国家を左右するような重大かつ極秘的な政治的事柄の駆け引きされる空間でもあった。それは「花街」が、日本の伝統的文化の生み出し手でありその豊富な源泉であるという認識と表裏一体のものとなっている。

### 1-4. 「花街」と国家

国家と「花街」というテーマは、近代に特異な現象である。その根幹、公娼制度については、ジェンダー研究分野における論考を大いに参照すべきであろう。

公娼制度とは、明治33年内務省令第44号「娼妓取締規則」および警視庁令第37号「貸座敷、引手茶屋、娼妓取締規則」の内容を基に簡潔にまとめると、遊郭の集娼・公認の指定地制度であり、国家から鑑札を受けた娼妓が貸座敷という場所を借りて営業する、そして売り上げの決まった割合を税として国家に収め、かつ性病検診の義務を負うもので、近代の発明品である。

公娼制度に関する研究は一方で女性解放運動の歴史でもあるが、同時に近代帝国主義がはらんだ矛盾と犠牲の物語でもあった。軍隊と花街、それはもともとこの問題を端的に象徴する表現である。多くの、とりわけ女性研究者たちがこのテーマを探求してきた。中でも、女性解放運動に階級制という概念を挿入することによって、むしろ家庭にある健全な中上流婦人/下層階級の淫らな売春婦という女性分断運動であったと指摘したのが藤目(1997=1999)である。それを発展させて「衛生論」との接続を図り、公娼制度とは健康な娼婦を軍隊にあてがうための制度であり「花街」とは「性の国家管理」であると指摘したのが藤野(2001)であった。

また林(2017)は、明治年間の廃娼運動に着目

し、それが衛生論の枠組みを超えて、広く国民一般に男らしさ／女らしさというジェンダーイデオロギーを植え付けたと指摘した。この三者の議論から言えること、それは国家と「花街」の関係史とはすなわち帝国の駆動力たる軍隊・企業・学校と「花街」との関係性にとどまらず、近代家族というごくありふれた現象にまで及ぶということである。

帝国主義と親和的であったからこそ、「花街」は近代という時代に、これほどまでに増殖し、幅広い需要層を持つに至ったのである。全国津々浦々、過去から現在という悠久の時の流れの中で、おおよそ「花街」が存在しなかった町はなく、規模の大小こそ違えども、遊郭、芸者町、私娼街、カフェー街…いずれかの「花街的なる要素」をもってきた。昭和初期を例に挙げ、松川二郎の『全国花街めぐり』(1929)および『三都花街めぐり』(1932)、日本遊覧社編集の『全国遊郭案内』(1930)を紐解けば、我々はかくも無数の花街が全国に分布していたと知るのである。しかも、その少なからぬ数が近代に入ってからより新しく、為政者の明確な意図のもとに造り出され、営業者および地元地権者たちの力添えもあって生み出されてきたのである。都市開発の手法としての「花街」研究への接続点が、ここで得られる。

#### 1-5.都市開発の方法論としての「花街」

都市計画の制度が整理されるのもやはり近代であった。都市開発の手段としての花街は、ここにおいて国家と結びつき、全国展開を見せたのである。近年になって、この生み出され計画される「花街」という研究分野が、主として地理学・都市計画学分野で進められている。その先駆者は地理学者の加藤政洋氏の一連の「花街」研究である(加藤 2005、2009a、2009b、2011など)。

近世の遊里の立地を江戸前期・後期と分けて分析した北地・渡邊・村田(1998)で示されたように、加藤(2005)は、芸者町としての「花街」の空間形態の特徴を洗い出すため、全国のレベルで近代「花街」の事例を調べ、分散形式(遊郭で言う散娼)から集合形式(同じく遊郭では集娼)まで幅広く分布すること、地域差が激しいことを突き止めた。また、都市開発史として「花街」という現象を捉え、新開地の有効な開発手法としてこれを位置づけた。また「花街」の「空間レンタル業」的な側面に早くから注目している

(加藤 2009b)。しかし、初田(2014)が指摘するように、その研究はいずれも計画側から見た開発史という色彩が強く、受容する地域社会側の考察が不足しており、この部分で更なる論考の深化が望まれる。

#### 1-6.「花街」の日常性と都市計画

「花街」は確かに「男子の慰安者」たるべく造り出されたものである。ただそれが、娯楽という盛り場的な価値観の中でばかり議論されてきた、そこに再考を促すのである。「花街」は非日常的な世界にとどまらず、優れて日常的な秩序の生み出し手である。先行研究は「花街」を都市における悪場所として、日常的世界からの切り離しを図ってきたが、我々が普遍的な価値観と思っただけで疑われないもの、例えば家族のかたち、恋愛や結婚に関する意識という、非常に個人的な事柄ながら常識的など言われる慣習、それらを裏打ちしているものこそ「花街」なのである。

むしろ、こういった方が分かりやすい。「花街」は、日常世界の矛盾のはけ口であり、犠牲の産物であると同時に、主体的に生きられるもの、選び取られる世界なのである。「花街」は慰安的存在であるが、それは第一にこれが性愛空間であることを示しているのである。性愛という問題から逃れられる人間はいない。であるからこそ、「花街」は普遍的な事実なのである。そして性愛を対人関係の一形態であると位置づけると、「花街」の本質が他者との関係性の中に育まれる相互交流であることが分かるであろう。性愛を中心として対人関係一般を商品化した空間、それが「花街」なのである。

その「花街」を都市空間の中でいかに創出するのか、そのための手法を法制度の決まりごとに従って提供したものが都市計画の一つの功績(?)だったのではあるまいか。近世の新吉原や島原遊郭が都市の中心部を避けた郊外に意図的に造り出されたことはあまりに有名であるが、近代の駅を中心とした「花街」の立地すらも、ここに商業地域が集められ、その地域性の中に「花街」を閉じ込めたことに由来する。

#### 1-7.ジェンダー地理学と都市内部の機能分化

さらに論を一步進めれば、これが近現代に特徴的な社会構造とも密接なる関係を有しているとわかるであろう。近代資本制は大量生産と大量消費のフォーディズム体制を支えるものとし

て、職住分離を推し進めた。矢沢(1993)が指摘するように、資本制は、生産基地としての工業地帯、都心の高度消費地帯、郊外の住宅地帯を生み出したが、職場と自宅の中間領域たる「第三空間」として「盛り場」、そして「花街」の誕生と繁栄は、とりもおさず企業戦士としての男性を中心に置き、家庭を守る主婦としての女性を「地域」に閉じ込め(専業主婦の誕生!)、それにふさわしくないとされた女性を接待係としてその外部に見出した(ホステス・愛人の誕生!)、男女の性別分業と女性の二分化の空間・経済的な産物である(山下 1994)。

この女性の二分化によって、女性間の間に「ウチ」を守る家庭の母としての「素人」と、社交を司ると同時に性愛の対象ともなる「ソト」の「玄人」が生み出されたのである。これを実用的ツールとして、背後から協力的に支えたものこそ、近代都市計画ではなかったか。

## 2.本論文の構成

### 2-1.目次

本論文の構成は以下のようなものとなっている。

序章 | 夜という世界、花街という世界

第1章 | 花街とは何か

第2章 | 都市開発史における花街

第3章 | 戦前の東京における特殊「遊園地」建設計画とその顛末

第4章 | 江戸川区小岩における盛り場と花街①  
—美観商店街の成立と赤線・東京パレス—

第5章 | 江戸川区小岩における盛り場と花街②  
—マーケットから商店街へ—

終章 | 花街と都市空間は今後どのような関係性を結んでゆくのか

このうち1章と2章が【第1部】理論編、3章～5章が【第2部】事例編となっている。

### 2-2.理論編

本編では、成人男性専用の放蕩の歓楽郷としての余暇的・享乐的な盛り場論に「花街」を包括するのではなく、まさにそれら非日常性の反対にある日常的事実として、私たちの常識と社会秩序の隠された担い手として、「花街」を位置づける。そのためには「花街」を以下の三つの概念で表すことが適当であろう。

「花街」を特徴づける、色情としての「色」と、社交を助けるものとしての「芸」は、いずれも「商」としての評価であるが、これらと重なり合う「住」としての地域性と社会性も忘れてはならない。「花街」はそれ自体がひとつの住空間なのである。この性質は近年薄まりつつあるが、ある種の女の生活共同体的な側面は、形態を変容しつつも受け継がれているといえる。「花街」という言葉の再定義を試みるとともにその本質にまで掘り下げた議論を展開する、それが第1章の目的である。

しかし、先行研究がこだわり抜いた「花街」の近世/近代の連続性と非連続性という論点にも触れねばなるまい。次の第2章で考察したいのは、「花街」の近代という特異性である。「花街」という現象の多くは既に近世に基礎を得ているとしても、近代化と言われる諸現象、帝国主義と中央集権国家の再編成、および国防と対外侵略の手段としての軍隊、殖産興業の牽引役としての企業・大工場、さらに「国民」製造工場たる教育機関の整備が「花街」に与えた影響には無視できぬくらい大きなものがある。「花街」は、近代日本の国策に巻き込まれ、そこに大輪の花を咲かせたのである。この時代は歴史上まれにみる「花街」の拡大繁栄期であり、新開地には必ずと言ってもよいほど土地開発の手法として「花街」が新設された。先行研究とは別視点から、現代の「花街」の下地ともなっているこの時代の、「花街」の繁栄と新設がどうしてもたらされたのかを考察する。

### 2-3.事例編

#### 2-3-1.論点と使用文献

ここでは、都市開発史としての花街の近現代と都市空間との関連性を考察する。論点は3つ。①空間レンタル業としての「商」だけではなく、女の生活共同体としての「住」の側面も意識すること。②開発主体だけではなく、「花街」によってもたらされた地域社会の受容と再編成の過程を考察する。③指定地という制度そのものが生み出されるプロセスに着目する。

使用文献は各種地図をはじめ、航空写真、「花街」関係の名簿、自治体資料、当時のルポルタージュ、新聞雑誌記事、警察関係資料など多岐にわたる。なお、4章5章に関しては国会図書館憲政資料室所蔵のプランゲ文章および関係者ヒアリングの結果を利用している。

### 2-3-2.第3章の内容

先行研究は明確な主体の介在する開発史的色彩が極めて強いが、その際に半ば前提として登場するのが指定地制度である。近世に由来を持つ「花街」は、あまりに明確すぎるいくつかの遊郭を除けば、「慣例地」としてその設立意図が曖昧化され、自然発生したかのごとくに取り扱われる一方、近代の「花街」は土地開発の名目で計画的に設置されたとみなす。しかし、この「慣例地」こそ「花街」研究における重要な論点を提供してくれる存在であると私は確信する。「慣例地」という実例があってはじめて指定地制度が生み出されたのであり、制度そのものがまだなかった時分、どのようにして「花街」が自らを「慣例地」として見出し、定義付け、その結果として「公認の」存在なりえたか、このプロセスに都市開発の方法論たる「花街」の意義はあるのではないか、と問題提起できるからである。「慣例地」指定の背景を探るべく、事例を東京の郊外に位置する代表的「慣例地」たる亀戸天神裏を中心に、向島、下谷本郷、白山、尾久などオムニバス形式で広くとったのが第3章である。

亀戸には、明治末に特殊な「遊園地」が計画され、実現した場所である。その実態は芸者町たる三業地と、私娼街たる銘酒屋がともに許可(後者は黙許)されるという異質な空間だった。3700番地、通称「亀戸遊園地」の誕生背景から、この時代特有の「花街」をめぐる政治地理学を描き出す。土地の繁栄を願う亀戸町有力者、地権者、外部のプロカー、そして「浅草十二階下の魔窟」をクリアランスしたい警察及び東京市、十二階下を追われた暁には代替地を郊外に得て営業再開を望む銘酒屋経営者たち、それらアクター間の思惑が交差した場所こそ亀戸遊園地だった。そんな中の三業地指定は、一種の安定剤として作用したとわかる。

### 2-3-3.第4章の内容

先行研究においてどうしても不足しがちであった、開発主体(上位論的主体)のみならずそれをどう地域社会が受け止めるのかという視点、これを本論文では下位論的主体の受容と適応と呼ぶが、このプロセスの解明と考察は、第4章と第5章に取り上げる江戸川区小岩における盛り場と商業地理の再編成、および「花街」との関連性を扱った部分で特集する。

敗戦直後の小岩の町づくりを主導した一人の

青年政治家・加藤好雄(上位論的主体)の活動とその思想に着目すると同時に、彼のもとに集まりやがてはそれぞれに独立した組織体を形成してまちづくりを現場で担う人材となっていく各商店会及び同業者組合(下位論的主体)の動向にも目を配ることで、「花街」という存在を地域社会が受容し、その過程で旧来の空間的秩序がどのようにして再編成されてゆくのかを考察する。それは、戦後も戦前同様、「花街」を起爆剤とした都市開発がなされたのではないかという問いに答えることであり、「花街」という存在そのものが地域社会に与えた影響を、土地繁栄という策以外にも考察するきっかけである。小売店を中心とした美観商店街という組織が地域づくりのために生み出されるが、彼らのまとまりをもたらしたものが「花街」であった。

4章で登場する「花街」は、戦後に雨後の筍のごとく族生した赤線。全国規模で指定された最後の集娼・公認型の(つまり指定地制度下にある)「花街」だといえるであろう。戦後風俗の一面を成したこの赤線ではあるが、数多い関連施設の中でもダンスホール・売店・運動場を備えた廓式の異色なそれが小岩には存在した。その名を東京パレスという。

赤線という「花街」は、その性格上国家売春施設という、まさに管理された性のビジネスモデルの形態を如実に有しているながら、同時にアメリカへの窓口であり、文化輸入基地であった。「花街」は、かつての遊郭が文化を生み出すその大いなる母体であった如く、その根底に余剰の金と時間を蓄えている。ここから文化なるものが生み出され、広まるのである。文化という言葉は、一見高尚で近寄りがたい印象を与えるが、何のこともない、その土壌は腐った土なのである。腐ったものがはらむ豊富な栄養を身に受けて、ただ一つ咲いた美しい花こそ文化と呼ばれるその実態なのである。

### 2-3-4.第5章の内容

本章ではカフェー街としての花街を取り上げる。指定地制度の外にあるこのような花街は、従来の花街研究では十分に都市開発史的な文脈で取り上げられづらかった。それを、闇市と商店街を言うキーワードを使うことで空間的把握を目指している。

美観商店街成立の陰で居場所を失い、中心から追われた露店市が、代替地にマーケットという形態で落ち着き、やがて組合を結成、また近隣敷地を取得し、移転・展開していくことで、

新興の商店街として都市の中に定着していく過程を追う。その際にも中心となったのは「花街」であった。ベニスマーケットはその初期段階において明確に「花街」として形態を備えていた。飲み屋街であり、女性が接客する小料理屋街である。

ベニスマーケットは最終的に解体され、跡地は道路と変ずるが、その周辺には歓楽的要素の強い商業集積が生まれていた。戦前同所に商店街はなく、戦後、それもベニスマーケットの賑わいに由来してできたと思われる。そこには新しく「花街」が生まれ、発展していった。

「花街」としての繁栄はさらに、外部から大手のキャバレーチェーンが多数小岩に新店したことで補強された。そのうちの一つ、キャバレー・ハリウッドは、託児所を備えたキャバレーとして知られ、生活苦に悩む女性らを積極的にホステスとして雇用し、彼女らの支援活動の一環としてのキャバレー経営という、慈善事業と「花街ビジネス」の重なりあった独特な経営方法で知られた。

現在と違い、当時の小料理屋や飲み屋は職住一致、すなわち住込み形態が広く見られた。都市計画的には商業地域という、まさしく住むに値しないとされた場所に、職住分離を基本とした住宅地域(ここに暮らすのはもちろん近代家族を生きる標準的な女とその家族である)から追い出された人々が住まうのである。ある種の“結婚外を生きる女の生活共同体”、その現代的な姿を、「花街」という空間のもちうる一つ特徴として描写したい。女という集団を分断し、ひとつを家庭の主婦に、もうひとつを娼婦に分けるのは「花街」なれば、分断され周縁化された女たちを包括しその生活を支えるのもまた「花街」なのである。

#### <参考文献>

(※)本文中で明示したのもののみ。実際の論文にはこの5~6倍の資料を費やしているが、紙幅の制限で省略した。詳細は本編にあたっていただきたい。

1. 明田鉄男(1990)『日本花街史』雄山閣
2. 有松賢、内田忠賢、倉石忠彦、小林忠雄【編】(2003)『都市民俗生活誌 第二巻 都市の活力』明石書店
3. 岩下尚史(2006=2009)『芸者論』雄山閣→

文春文庫

4. 岩下尚史(2007)『名妓の資格 細書・新橋夜咄』雄山閣
5. 牛垣雄矢(2008)「地理学を中心とした盛り場研究の現状」『地理誌叢』vol.50 No.1 pp53-59
6. 加藤政洋(2005)『花街—異空間の都市史』朝日選書
7. 加藤政洋(2009a)『敗戦と赤線 国策売春の時代』光文社新書
8. 加藤政洋(2009b)『京の花街ものがたり』角川選書
9. 加藤政洋(2011)『那覇 戦後の都市復興と歓楽街』フォレスト
10. 澤村明(2012)「花街の新しい試み—東京神楽坂『粹まち』と新潟『柳都振興』—」『新潟大学経済論集』92 pp201-210
11. 竹中聖人(2007)「花街の真正性と差異化の語り—北野上七軒と五番町をめぐって—」『Core Ethics』Vol.3 pp249-259
12. 日本遊覧社(1930)『全国遊郭案内』同社
13. 初田香成(2014)「白山—東京の三業地—」(佐賀朝、吉田伸之【編】(2014)『シリーズ遊郭社会 2 近世から近代へ』吉川弘文館に収録)
14. 服部銚二郎(1981)『盛り場 人間欲望の原点』鹿島出版会
15. 林葉子(2017)『性を管理する帝国—公娼制度下の「衛生」問題と娼婦運動—』大阪大学出版会
16. 藤野豊(2001)『性の国家管理 買売春の近現代史』不二出版
17. 藤目ゆき(1997=1999)『性の歴史学—公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版
18. 松川二郎(1929)『全国花街めぐり』誠堂文庫
19. 松川二郎(1932)『三都花街めぐり』誠堂文庫
20. 三宅孤軒(1935)『芸妓読本』全国同盟料理新聞社
21. 矢沢澄子【編】(1993)『都市と女性の社会学』サイエンス社
22. 山下悦子(1994)『妻が女を生きるとき 「悪妻」のすすめ』講談社
23. 吉見俊哉(1987=2008)『都市のドラマトゥルギー 東京・盛り場の社会史』弘文堂→河出書房新社